

京都嵯峨野の遺跡

- 広域立会調査による遺跡調査報告 -

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊

1997

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



嵯峨野の垂直写真（1996年11月撮影）



嵯峨野上空より東北を望む（1977年5月撮影）



化野出土金銅製蓋と蔵骨器

序

京都の嵯峨野一帯には、古墳や寺院跡、離宮跡など、著名な各時代にまたがる数多くの遺跡があります。当研究所は発足以来、これらの遺跡の調査を長年にわたり取り組み、調査・研究を鋭意進めてまいりました。なかでも、広域下水道工事に伴う立会調査は、市街地街路の掘削を対象とする調査であり、発掘調査とは異なり、道路上であるため多くの制約があり、調査方法に工夫と創意を必要としました。

当研究所では、自然科学の分野でよく行われる標本という考え方を取り入れ、土層断面観察の柱状模式図を等間隔で作成して、地点の記録が面の記録に広がり、地域全体の様相がマクロ的にわかるような記録方法を目指して調査を進めてまいりました。嵯峨野では作成した土層のポイント数が総数1万点を越えております。

本報告は、広域の立会調査で得られた調査データを中心に構成、作成したものであります。新たな遺跡の発見もあり、今までわからなかった寺院跡や集落跡の広がり、範囲などがわかり、遺跡分布の状況を知る嵯峨野地域の詳細な遺跡地図という性格をもっていると自負しております。一部ではありますが、データを基に嵯峨野地域の旧地形の復元も試みてみました。

この地域は、京都と関係深い渡来氏族である秦氏と関連しており、また平安時代以来、皇族と関係する離宮や寺院など京都の歴史を理解するうえで欠かすことのできない地域であります。本報告が、嵯峨野地域の歴史研究に基礎データを提供し、京都の歴史解明の一助となることを願っております。

おわりにあたって、立会調査を依頼された方々、京都市を始め関係諸機関に日頃のご協力にお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の日頃の活動をご理解いただけるようお願い申し上げます。

1997年2月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市右京区の南東部を除く全域、西京区、中京区、北区の一部の地域に所在する遺跡において、昭和 51 年 (1976) 度から平成 6 年 (1994) 度実施した広域立会調査の成果を中心に編集した調査報告書である。
- 2 第 II 章 -1 に言及した範囲を便宜上、嵯峨野とし、双ヶ岡地域、太秦地域、嵯峨・嵐山地域に大区分し、さらに下水道埋設管布設の工事区 (調査区) を数単位にまとめて地区とする。
- 3 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図 (1:2,500) 北嵯峨・宇多野・衣笠山・小倉山・大覚寺・鳴滝・花園・嵐山・太秦・山ノ内・松尾・上桂、都市計画図 (1:10,000) 其八・其九、市街図 (1:30,000) を複製、調整したものである。また、国土地理院発行の地形図 (1:25,000) 京都西北部・京都西南部も調整して使用した。
- 4 図中の方位は平面直角座標系 VI により表示し、標高は京都市水準点を使用した。附章位置図の方位は北を上に掲載し、その他の図は適宜、方位記号で表示した。
- 5 昭和 55 年 (1980) 度以前の未報告調査については、附章に収録した。
- 6 附章中で使用した遺構表示記号は奈良国立文化財研究所の用例に準じた。
(SA: 柵・築地・垣塀 SB: 竪穴住居・建物 SD: 溝・流路 SE: 井戸
SF: 道路・路面 SG: 池 SK: 土壙 SX: その他)
- 7 出土遺物の報告については、広域立会調査での出土以外のものも必要に応じて掲載する。
- 8 平安時代の土器の年代観については、『平安京右京三条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 10 冊 1990 年)、瓦の年代観については、「瓦と瓦窯の変遷」『平安京提要』(財団法人古代学協会・古代学研究所 1994 年)を基準とする。
- 9 本書に掲載した遺構・遺物の写真は牛嶋 茂 (現奈良国立文化財研究所)・村井伸也・幸明綾子が撮影し、遺構の一部を調査担当者が撮影した。
- 10 関係する文献、附章、章 - 節については、文献・附章・章 - 節番号を本文の肩口に付した。
- 11 本書の原稿執筆は以下のとおりである。(章 - 節 - 項)
加納敬二 (I -1・2 III -1 IV -2-a V -1 附 -8・9)
小檜山一良 (II -1 III -3 IV -1 IV -2-c IV -3 V -3 附 -4)
平田 泰 (II -2 III -2 IV -2-b IV -3 V -2 附 -1・11・12)
菅田 薫 (IV -3 附 -10) 鈴木久男 (附 -2)
中村 敦 (附 -3・13) 平方幸雄 (附 -5)
平尾政幸 (附 -6) 上村和直 (附 -7)
英文要旨はモンペティ恭代が作成し、スチュワート・A・ワックス氏 (京都外国語大学助教) に校訂を願った。
- 12 本書作成には以下の職員が作業協力した。

土器復原 多田清治 村上 勉

製 図 出水みゆき 田中利津子 中村享子

製図協力 長戸満男 尾藤徳行

資料作成 端美和子

編集協力 児玉光世 近藤章子 原山充志

13 編集と調整は加納、小檜山、平田の3名が行い、鈴木久男、辻 純一、永田信一、中村 敦、本弥八郎が協力した。

14 本書の作成には以下の方々、法人、団体の協力があった。記して謝意を表したい。

梅川光隆、江谷 寛、岡村幸男、久保智康、小松敏男、服部政義、原 慧、森 郁夫、吉川義彦、渡辺義和

化野念仏寺、広隆寺、清涼寺、大覚寺、天龍寺、妙心寺、京都市、京都市教育委員会、京都市下水道局、京都市埋蔵文化財調査センター

(五十音順・敬称略)

目 次

第Ⅰ章 調査の経過と方法		附章 昭和55年度以前の調査概要	
1 調査の経過	1	1 広隆寺旧境内1	150
2 調査の方法	5	2 檀林寺跡	152
第Ⅱ章 立地と遺跡		3 平安京右京二条四坊	153
1 嵯峨野の位置と地形	9	4 広隆寺旧境内・弁天島経塚群	154
2 嵯峨野の遺跡と歴史的概観	12	5 史跡妙心寺境内・平安京右京北辺 四坊1	161
第Ⅲ章 遺構		6 広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡	162
1 双ヶ岡地域の遺構分布	17	7 広隆寺旧境内2	163
2 太秦地域の遺構分布	25	8 平安京右京三条三・四坊	165
3 嵯峨・嵐山地域の遺構分布	40	9 平安京右京二条三・四坊	167
第Ⅳ章 遺物		10 平安京右京一条三・四坊・ 五位山古墳	170
1 土器類		11 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳 群	171
a 双ヶ岡・太秦地域	63	12 史跡妙心寺境内・平安京右京北辺 四坊2	172
b 嵯峨・嵐山地域	73	13 上ノ段町遺跡	173
2 瓦甎類		付表	
a 双ヶ岡地域	80	付表1 地区別遺構分布表	175
b 太秦地域	91	付表2 調査一覧表	214
c 嵯峨・嵐山地域	104	付表3 嵯峨野文献一覧表	240
3 その他の遺物	110	付表4 嵯峨野略年表	251
第Ⅴ章 考察		英文要旨	256
1 双ヶ岡地域の遺跡	116		
2 太秦地域の遺跡	128		
3 嵯峨・嵐山地域の遺跡	137		

図 版 目 次

巻頭図版 1 嵯峨野の垂直写真(1996年11月撮影)

巻頭図版 2 嵯峨野上空より東北を望む(1977年5月撮影)

化野出土金銅製蓋と蔵骨器

図版 1 調査位置図(北嵯峨西半)

図版 2 調査位置図(北嵯峨東半)

図版 3 調査位置図(宇多野西半)

図版 4 調査位置図(宇多野東半)

図版 5 調査位置図(衣笠山)

図版 6 調査位置図(小倉山)

図版 7 調査位置図(大覚寺西半)

図版 8 調査位置図(大覚寺東半)

図版 9 調査位置図(鳴滝西半)

図版 10 調査位置図(鳴滝東半)

図版 11 調査位置図(花園西半)

図版 12 調査位置図(花園東半)

図版 13 調査位置図(嵐山西半)

図版 14 調査位置図(嵐山東半)

図版 15 調査位置図(太秦西半)

図版 16 調査位置図(太秦東半)

図版 17 調査位置図(山ノ内西半)

図版 18 調査位置図(山ノ内東半)

図版 19 調査位置図(松尾)

図版 20 調査位置図(上桂西半)

図版 21 調査位置図(上桂東半)

図版 22 航空写真 1(双ヶ岡地域) 1 双ヶ岡周辺(南東から)

2 仁和寺周辺(南から)

図版 23 航空写真 2(太秦地域) 1 太秦周辺(西から)

2 広隆寺周辺(南西から)

図版 24 航空写真 3(嵯峨・嵐山地域) 1 嵯峨周辺(南西から)

2 小倉山周辺(南東から)

図版 25 遺構(双ヶ岡地域) 1 調査 11-12 調査風景(南から)

図版 26 遺構（太秦地域）

- 2 同 流路 350 西肩部（南から）
- 3 同 調査風景（北から）
- 4 同 土壌 356 瓦出土状況（東から）
- 5 調査 11-6 調査風景（北から）
- 6 同 溝 266 検出状況（東から）
- 7 調査 10-74 調査風景（北から）
- 8 同 版築 13 検出状況（東から）
- 1 調査 15-22 調査風景（東から）
- 2 同 蛇塚古墳 石材検出状況（真上から）
- 3 調査 10-176 調査風景（東から）
- 4 同 軒瓦出土状況（北から）
- 5 調査 16-70 調査風景（東から）
- 6 同 土壌 15 検出状況（南から）
- 7 調査 3-3 調査風景（東から）
- 8 同 御堂ヶ池 2 号墳検出状況（東から）

図版 27 遺構（嵯峨・嵐山地域）

- 1 調査 7-40 調査風景（東から）
- 2 同 溝 69 検出状況（南から）
- 3 調査 8-65 調査風景（北東から）
- 4 同 井戸 13 検出状況（南から）
- 5 調査 13-1 調査風景（西から）
- 6 同 柱穴 141 検出状況（北から）
- 7 調査 1-2 調査風景（西から）
- 8 同 遺物包含層 120 検出状況（南から）

図版 28 遺構（嵯峨・嵐山地域）

- 1 調査 8-72 調査風景（南から）
- 2 同 柱穴 73 検出状況（西から）
- 3 調査 14-26 調査風景（南から）
- 4 同 堆積土層（東から）
- 5 調査 14-29 調査風景（東から）
- 6 同 堆積土層（北から）
- 7 同 堆積土層（南から）
- 8 調査 7-21 調査風景（南から）
- 9 同 堆積土層（西から）

図版 29 遺構（路面 1）

- 1 調査 10-118 調査風景（西から）
- 2 同 路面 14（東から）
- 3 同 路面 15（東から）

	4	調査 10-199	調査風景（北から）
	5	同	路面 42（西南から）
	6	調査 9-14	調査風景（北から）
	7	同	路面 5（東から）
	8	同	路面 6（東から）
	9	調査 9-36	調査風景（東から）
	10	同	路面 76（北から）
	11	同	路面 83（北から）
図版 30		遺構（路面 2）	
	1	調査 8-51	調査風景（西から）
	2	同	路面 35（南から）
	3	調査 8-48	調査風景（南西から）
	4	同	路面 26（南から）
	5	同	路面 24（南から）
	6	調査 8-46	調査風景（南から）
	7	同	路面 9（南から）
	8	同	路面 9 西 10m（南から）
	9	調査 8-46	調査風景（東から）
	10	同	路面 1（南から）
	11	同	路面 1 東 10m（東から）
図版 31		遺物（双ヶ岡地域）	出土土器
図版 32		遺物（太秦地域）	出土土器
図版 33		遺物（太秦地域）	出土土器
図版 34		遺物（太秦地域）	出土土器
図版 35		遺物（嵯峨・嵐山地域）	出土土器
図版 36		遺物（嵯峨・嵐山地域）	出土土器
図版 37		遺物（嵯峨・嵐山地域）	出土土器
図版 38		遺物（双ヶ岡地域）	出土軒瓦
図版 39		遺物（双ヶ岡地域）	出土軒瓦
図版 40		遺物（双ヶ岡地域）	出土軒瓦
図版 41		遺物（双ヶ岡地域）	出土軒瓦
図版 42		遺物（太秦地域）	出土軒瓦
図版 43		遺物（太秦地域）	出土軒瓦
図版 44		遺物（太秦地域）	出土軒瓦
図版 45		遺物（太秦地域）	出土軒瓦
図版 46		遺物（嵯峨・嵐山地域）	出土軒瓦

- 図版 47 遺物（嵯峨・嵐山地域） 出土軒瓦
- 図版 48 遺物（太秦地域） 1 その他の出土遺物（円筒埴輪片）
2 同（鑄型片）
- 図版 49 遺物（太秦、嵯峨・嵐山地域） 1 その他の出土遺物（左仏像 右国産銭貨）
2 同（石仏）
- 図版 50 附章写真 1 1 広隆寺旧境内 1 全景（附章 1 北から）
2 檀林寺跡全景（附章 2 北から）
- 図版 51 附章写真 2 1 広隆寺旧境内・弁天島経塚群 調査以前 1964 年全景（附章 4 南から）
2 同 経塚群全景（同 西南から）
- 図版 52 附章写真 3 広隆寺旧境内・弁天島経塚群出土遺物 1（附章 4）
- 図版 53 附章写真 4 広隆寺旧境内・弁天島経塚群出土遺物 2（附章 4）
- 図版 54 附章写真 5 1 史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊 1 全景（附章 5 北から）
2 広隆寺旧境内 2 全景（附章 7 西から）
- 図版 55 附章写真 6 1 平安京右京一条三・四坊・五位山古墳 全景（附章 10 北から）
2 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群 全景（附章 11 東から）
- 図版 56 附章写真 7 1 史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊 2 全景（附章 12 北から）
2 上ノ段町遺跡 全景（附章 13 西から）
- 図版 57 絵図 1 1 『臨川寺領大井郷界畔絵図写』貞和三年（1347）
2 『大覚寺伽藍図』
- 図版 58 絵図 2 1 『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』
2 『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』

図 目 次

図 1 嵯峨野の地域区分図…………… 1	図 10 鳴滝地区の遺構分布…………… 18
図 2 嵯峨野の位置と範囲…………… 9	図 11 宇多野地区の遺構分布…………… 19
図 3 嵯峨野の地形分類図…………… 10	図 12 常盤1地区の遺構分布…………… 20
図 4 嵯峨野の等高線図…………… 11	図 13 御室地区の遺構分布…………… 21
図 5 旧石器時代から古墳時代前期の遺跡 …………… 12	図 14 花園地区の遺構分布1…………… 22
図 6 古墳時代中期から奈良時代の遺跡…………… 13	図 15 花園地区の遺構分布2…………… 23
図 7 平安時代の遺跡…………… 14	図 16 花園地区の遺構分布3…………… 24
図 8 鎌倉時代以降の遺跡…………… 15	図 17 太秦地域の地区割り…………… 25
図 9 双ヶ岡地域の地区割り…………… 17	図 18 常盤2地区の遺構分布…………… 26
	図 19 常盤3地区の遺構分布…………… 28

図20	常盤4 地区の遺構分布	28	図55	化野地区出土遺物3	78
図21	太秦1 地区の遺構分布	29	図56	鹿王院地区出土遺物	79
図22	太秦2 地区の遺構分布	30	図57	嵐山南地区出土遺物	79
図23	太秦3 地区の遺構分布	32	図58	鳴滝・常盤1 地区出土軒瓦	81
図24	太秦4 地区の遺構分布	33	図59	御室・花園地区出土軒瓦	83
図25	太秦5 地区の遺構分布	34	図60	花園地区出土軒瓦1	85
図26	太秦6 地区の遺構分布	36	図61	花園地区出土軒瓦2	86
図27	嵯峨野地区の遺構分布	37	図62	花園地区出土軒瓦3	87
図28	梅津1 地区の遺構分布	37	図63	花園地区出土軒瓦4	89
図29	梅津2 地区の遺構分布	38	図64	太秦4 地区出土軒瓦1	91
図30	嵯峨・嵐山地域の地区割り	40	図65	太秦4 地区出土軒瓦2	93
図31	北嵯峨地区の遺構分布	41	図66	太秦4 地区出土軒瓦3	94
図32	化野地区の遺構分布	44	図67	太秦4 地区出土軒瓦4	97
図33	化野地区の検出墓墳断面図	45	図68	太秦4 地区出土軒瓦5	98
図34	清涼寺西地区の遺構分布	46	図69	太秦2 地区出土軒瓦1	101
図35	大覚寺南地区の遺構分布	47	図70	太秦2 地区出土軒瓦2	102
図36	広沢地区の遺構分布	49	図71	太秦5・その他地区出土軒瓦	103
図37	野々宮北地区の遺構分布	51	図72	北嵯峨・野々宮北・天龍寺・嵐山南 地区出土瓦	104
図38	天龍寺地区の遺構分布	54	図73	清涼寺西地区採取軒瓦	105
図39	鹿王院地区の遺構分布	56	図74	天龍寺地区採取軒瓦	107
図40	車折地区の遺構分布	58	図75	化野・天龍寺・鹿王院地区出土軒瓦	108
図41	嵐山北地区の遺構分布	60	図76	天龍寺地区出土押印瓦拓影	109
図42	嵐山南地区の遺構分布	61	図77	太秦4 地区出土縄文土器・石器	110
図43	花園・常盤1 地区出土遺物	64	図78	太秦4 地区出土円筒埴輪・鋳型	111
図44	太秦1 地区出土土器1	66	図79	北嵯峨地区出土縄文土器	112
図45	太秦1 地区出土土器2	67	図80	化野地区墓5 出土銭貨拓影	112
図46	太秦4 地区出土土器1	69	図81	北嵯峨・化野地区の石造物	114
図47	太秦4 地区出土土器2	70	図82	天龍寺地区出土縄文土器	115
図48	太秦5 地区出土土器	71	図83	平安京北西域・法金剛院周辺の遺構 分布	117
図49	太秦6 地区出土土器	72	図84	四円寺・北院周辺の遺構分布	119
図50	鹿王院・車折地区出土土器	73	図85	仁和寺院家周辺の遺構分布	121
図51	天龍寺地区出土土器	74	図86	双ヶ岡地域の旧地形等高線図	125
図52	北嵯峨地区出土土器	76	図87	太秦地域の遺跡配置	129
図53	化野地区出土遺物1	77			
図54	化野地区出土遺物2	78			

図88	古墳時代の遺跡と古道配置	134	図110	経容器実測図	157
図89	平安時代の遺跡と古道配置	135	図111	経筒外容器実測図	157
図90	大覚寺周辺の遺構分布	137	図112	金属・石・ガラス・木製品実測図	158
図91	大覚寺境内出土軒瓦	138	図113	金属・石製品実測図	159
図92	化野の墓域推定図	140	図114	鏡実測図	159
図93	天龍寺周辺の遺構分布	142	図115	青白磁実測図	160
図94	山城国葛野郡班田図	143	図116	瓦拓影図	160
図95	鹿王院・車折神社周辺の遺構分布	144	図117	調査位置図	161
図96	山城国葛野郡条里比定図	145	図118	遺構平面図	161
図97	嵐山周辺の遺構分布	146	図119	調査位置図	162
図98	平安宮太政官出土軒瓦	147	図120	調査位置図	163
図99	調査位置図	150	図121	遺構平面図	163
図100	遺構平面図	151	図122	調査位置図	165
図101	調査位置図	152	図123	調査位置図	168
図102	遺構平面図	152	図124	調査位置図	170
図103	出土軒瓦実測図	152	図125	調査位置図	171
図104	調査位置図	153	図126	遺構平面図	171
図105	調査位置図	154	図127	調査位置図	172
図106	調査区配置図	154	図128	遺構平面図	172
図107	経塚実測図	155	図129	調査位置図	173
図108	経塚断面図	155	図130	遺構実測図	173
図109	経石実測図	156	Fig. 131	Map of Sagano Area	259

写 真 目 次

写真 1	双ヶ岡地域の調査風景	2	写真 7	記録カード	7
写真 2	太秦地域の調査風景	3	写真 8	土層断面図台帳	7
写真 3	嵯峨・嵐山地域の調査風景	4	写真 9	軒平瓦側面部	105
写真 4	遺構の検出	6	写真10	太秦4地区出土土製品	111
写真 5	土層・遺構の記録	6	写真11	全景(北から)	151
写真 6	遺物の採取	6	写真12	全景(西から)	153

第 I 章 調査の経過と方法

1 調査の経過

嵯峨野を対象にした広域立会調査は、昭和 58 年（1983）度に双ヶ岡地域から始まっている。研究所発足前の昭和 40 年（1965）から昭和 45 年（1970）にかけて、京都大学考古学研究室により、全域で分布調査が実施されており、昭和 46 年（1971）には古墳を中心に遺跡の位置、内容などが『嵯峨野の古墳時代』^{文154}としてまとめられ、嵯峨野の遺跡台帳としての役割をはたしてきた。それ以後、寺院跡や古墳群などの数例の発掘調査が実施されてきたが、遺跡の拡がり、新たな遺跡の発見例は地域の広さからすればわずかで、昭和 46 年以前の分布調査で得られた全域における遺跡状況に、新たな知見を加えるには至らなかった。そうした状況を踏まえ、全街路で広域立会調査を実施した。調査では遺構・遺物の検出が相次ぎ、新たな遺跡の発見が数多くあった。

以下、昭和 51 年（1976）11 月の研究所発足から平成 8 年（1996）3 月迄の嵯峨野における全調査の経過を、双ヶ岡、太秦、嵯峨・嵐山地域の順で、広域立会調査（以下、調査）を中心に報告する。

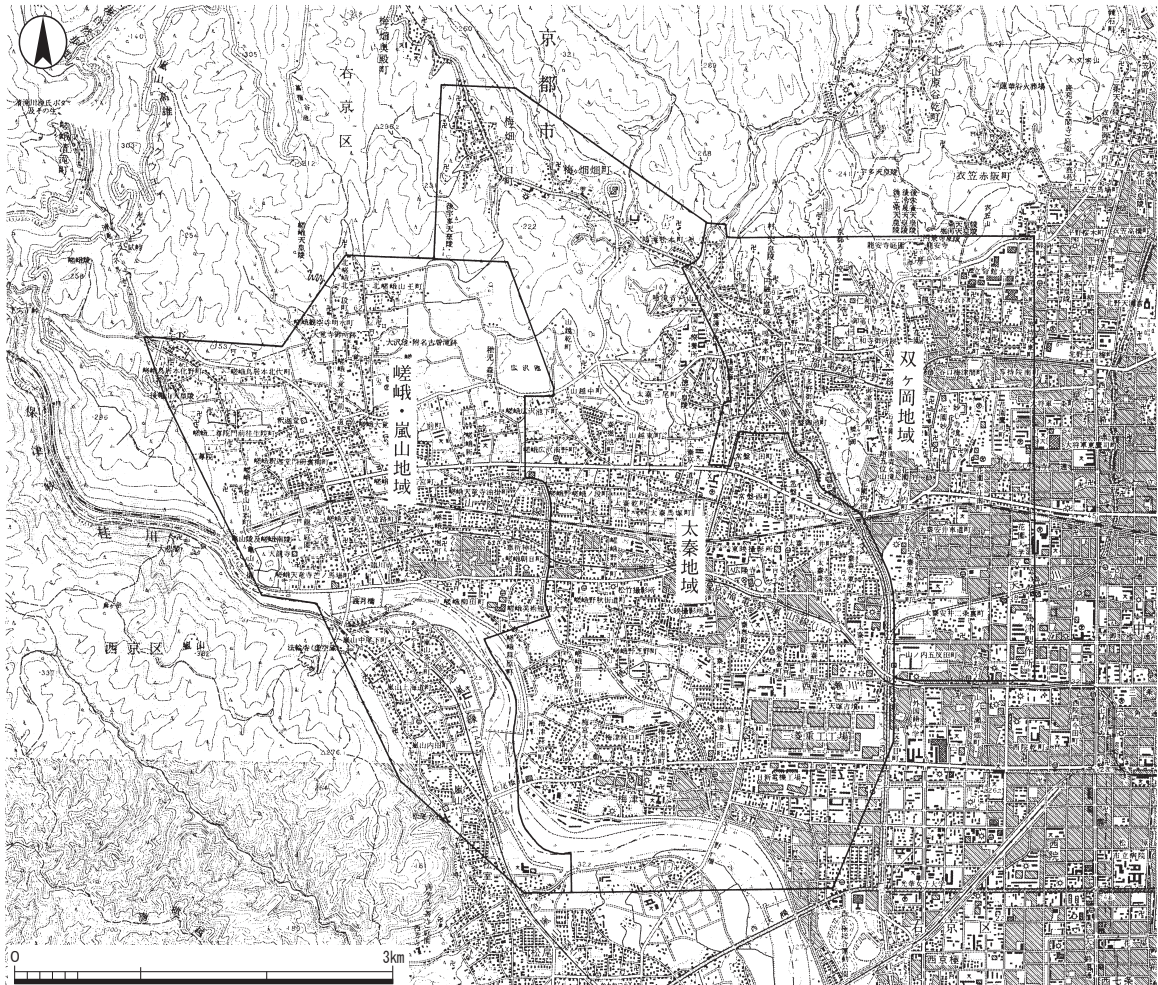


図 1 嵯峨野の地域区分図 (1 : 60,000)

双ヶ岡地域の調査

この地域の調査は、昭和 58 年（1983）度の平安京右京北辺・一条四坊の調査^{文275} 11-43 からで、昭和 59 年（1984）度まで実施している。調査では条坊に関係した遺構を多数検出した。正親町小路、土御門大路、中御門大路の路面、側溝がその主要なものである。また、平安時代の宅地に伴う井戸・柱穴・土壌などの遺構群も検出しており、平安京右京の北西域における遺構の遺存が良好であることが明らかになった。



写真 1 双ヶ岡地域の調査風景

調査は昭和 59 年（1984）度から引き続き平安京外の西から北へ移り、仁和寺の南側一帯に建立された四円寺跡と仁和寺院家跡が対象となった。

仁和寺境内では、すでに研究所設立以前の昭和 37 年（1962）度に発掘調査^{文133}が行われ、八角円堂の南・西辺基壇が検出されている。昭和 51 年（1976）度には、研究所が発掘調査 11-2 を行い僧坊跡^{文336}が、昭和 55 年（1980）度の立会調査 11-1 では平安時代中期の土壌と後期の遺物包含層^{文230}が検出されている。

昭和 59 年（1984）度、法金剛院境内の調査 11-56^{文303}、円乗寺跡、円教寺跡の調査 11-6^{文303}を実施し、法金剛院境内では関連する土壌、溝、井戸を、円教寺跡では寺域の区画溝を検出している。昭和 61 年（1986）度、円宗寺跡の調査 11-12・10-57^{文227}では区画溝、井戸、土壌などと共に、多量の軒瓦を検出した。同年、南院跡の調査 10-58^{文382}では池、石組溝を検出した。南院跡では研究所発足以前、昭和 35 年（1960）度、発掘調査が行われ御堂跡^{文112}が検出されている。昭和 63 年（1988）度、北院の調査 4-12（Ⅲ-1）では区画溝を検出した。同年、仁和寺院家跡の発掘調査 10-78^{文337}では、平安時代後期の御堂跡、6 世紀中頃の円墳が検出された。

昭和 63 年（1988）度には御室川右岸の一帯で調査が始まる。鳴滝安井殿町から常盤草木町までの調査 10-49・50・74（Ⅲ-1）で平安時代前期の遺構群を検出し、新たな遺跡の発見となった。

太秦地域の調査

調査は昭和 60 年（1985）の森ヶ東瓦窯跡、広隆寺旧境内、一ノ井遺跡、和泉式部町遺跡の調査 11-112^{文315} から始まり、平成 4 年（1992）度には、御堂ヶ池古墳群の調査 3-2（Ⅲ-2）までを継続して実施した。

昭和 60 年（1985）度、森ヶ東瓦窯跡の調査 11-102^{文314} で多量の瓦を含む土壌を検出した。また、この調査では、和泉式部町を中心とした地区で弥生時代中期と古墳時代前期の集落跡を発見した。昭和 61 年（1986）度、森ヶ東瓦窯跡の立会調査 11-108^{文296} では、ロストル式の平窯が検出された。さらに昭和 62 年（1987）度の同窯跡調査 10-199^{文351} では現道路を形成する盛土から多量の瓦類が出土している。

昭和 61 年（1986）度、異古墳の試掘調査 9-18^{文295} で石室の一部を検出し、須恵器装飾付器台・金銅製馬具などが出土した。

同年の広隆寺旧境内の調査^{文351} 16-67 では、南西部で古墳時代後期から平安時代の遺構・遺物を検出し、複合遺跡であることが明らかとなった。昭和 51 年（1977）度の発掘調査 16-83（附 1）では、飛鳥時代から奈良時代の基壇の版築に伴う掘込地業（土壇状遺構）が検出された。昭和 53 年（1978）度には、弁天島経塚群の発掘調査 16-84（附 4）で 16 基の経塚が発見されている。平成 3 年（1991）度の 2 例の発掘調査^{文417 文416} 16-82・91 では、平安時代前期の溝が検出されており、昭和 60 年（1985）度以降の調査^{文351} 16-67・70 でも、平安時代前期の葛野郡条里に係る溝を数地点で検出している。



写真 2 太秦地域の調査風景

昭和 62 年（1987）度、西野町遺跡とその隣接地の調査^{文386} 15-22 では、古墳時代後期から平安時代前期の遺構・遺物を検出したことにより、遺跡範囲がさらに拡大することが判明した。昭和 57 年（1982）度、西野町遺跡隣接地にあたる嵯峨野小学校の発掘調査^{文249} 15-14 で、古墳時代後期の竪穴住居、平安時代前期の遺構・遺物が検出されている。昭和 63 年（1988）度、西野町遺跡の発掘調査^{文380} 15-21 でも、古墳時代後期の竪穴住居、平安時代前期の建物が検出されている。昭和 63 年（1988）度、蛇塚古墳の調査 15-8（Ⅲ-2）では、古墳をめぐる周濠の存在は確認できなかったが、旧流路か湿地を示す堆積土層を検出した。墳丘下層から出土した 6 世紀後半の遺物は、築造時期の上限を示すものであった。また同年、常盤東ノ町古墳群の調査^{文383} 10-118 では、常盤村ノ内町で弥生時代中期、古墳時代前期、平安時代中期の遺構・遺物を検出した。そのことにより御室川右岸の自然堤防上に弥生時代の集落の存在が考えられ、南東方向に立地する和泉式部町遺跡との関係からも貴重な発見であった。なお常盤東ノ町古墳群は、昭和 51 年（1976）度の発掘調査^{文197} 10-186 で発見された古墳群である。また翌年の昭和 52 年（1977）度には古墳群南の発掘調査^{文209} 10-173 で、古墳時代後期の集落跡である常盤仲之町遺跡が発見されている。

平成元年（1989）度の仲野親王陵古墳・上ノ段町遺跡の調査^{文404} 9-45 では、仲野親王陵古墳の後円部先端で周濠を検出した。上ノ段町遺跡の発見は、昭和 55 年（1980）度の蜂ヶ岡中学校の発掘調査 9-44（附 13）で、古墳時代後期の竪穴住居、建物が検出されたことによる。さらに昭和 63 年（1988）度、同中学校の発掘調査^{文378} 9-42 で、古墳時代後期の竪穴住居、建物、溝が検出されている。調査^{文404} 9-45 では古墳時代後期の遺物包含層の検出により遺跡がさらに西へ広がることを確認した。なお同年、西京極東衣手町の試掘調査^{文284} 21-14 では、飛鳥時代の甕棺墓が検出され、東衣手町遺跡の発見となった。

広沢池北東一帯の古墳群調査は、昭和 37 年（1962）度の御堂ヶ池古墳群の発掘調査^{文125} からである。研究所が調査を実施したのは昭和 58 年（1983）度の御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群の発掘調査^{文246 文256} 3-4、9-3・4 からで、翌 59 年には音戸山西支群の発掘調査^{文283} 9-5 を実施している。平成 4 年（1992）度、御堂ヶ池古墳群の調査^{文373} 3-3 では、すでに消滅したとされていた 3 基の古墳を検出した。

嵯峨・嵐山地域の調査

平成元年（1989）、有栖川より西側の鹿王院周辺から調査が始まり、平成5年（1993）度、桂川右岸の史跡名勝嵐山の調査まで毎年継続して実施した。調査の初例は、昭和51年（1977）度、臨川寺旧境内の発掘調査^{文214}14-14で、創建以前と以後の整地土層、室町時代を中心とする土器・瓦などが検出された。



写真3 嵯峨・嵐山地域の調査風景

平成3年（1991）度、史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山の調査^{文422}13-1では、平安時代前期から後期の遺構・遺物を検出した。前期の遺物包含層からは「大井寺」銘の軒平瓦が出土している。遺構・遺物の検出は平安時代前期に創建された檀林寺の存在を裏付けるものとなった。

平成3年（1991）度、史跡大覚寺御所跡の調査^{文420}7-12では、大覚寺に西接する南北道路で、区画を示す平安時代後期の南北溝を検出した。翌年の調査7-15（Ⅲ-3）では、さらに西側で平安時代の遺物包含層を検出した。平成3年（1991）度、大覚寺境内の試掘・立会調査^{文418}7-4では平安時代から江戸時代の遺構が検出されている。また同年の発掘調査^{文418}7-3で、平安時代前期の建物、池状遺構、有栖川の旧流路が検出された。

平成4年（1992）度、史跡名勝嵐山の北半の調査^{文429}14-26では、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を検出した。また同年、南半の調査^{文429}14-26で、平安時代前期から後期の遺構・遺物を検出した。この調査で平安時代前期の東西溝を検出し、土器類、軒平瓦、甗などが出土した。当地の南方にあたる西京区松室中溝町では、昭和58年（1983）度、発掘調査^{文274}19-4により古墳時代後期の灌漑用水路とみられる大溝が検出されている。

平成5年（1993）度、史跡大覚寺御所跡・嵯峨院跡の調査^{文434}1-2を実施した。当地では昭和59年（1984）度、史跡大覚寺御所跡・嵯峨院の立会調査1-6により嵯峨院に関連する平安時代前期の遺構・遺物が検出されている。調査1-2（Ⅲ-3）でも関連する平安時代前期から中期の遺構・遺物を検出した。遺物包含層の検出範囲から嵯峨院の推定位置が、さらに北方に広がることが判明した。また、この調査では縄文時代中期の縄文土器を土壌から検出している。

同年（1993）度、史跡名勝嵐山に隣接する調査^{文428}7-28では、嵯峨天龍寺立石町で平安時代前期から室町時代の遺構・遺物を検出した。検出した平安時代前期の遺構は檀林寺に、鎌倉時代の遺構は亀山殿に、室町時代前期の遺構は創建当初の天龍寺に関連するとみられた。平成4年（1992）度、天龍寺旧境内の発掘調査^{文426}13-5では、鎌倉時代から室町時代の濠、石積み地業などが検出されている。

平成5年（1993）度の史跡名勝嵐山の調査^{文435}6-3では、化野地区で平安時代後期から江戸時代にかけての土壇墓を多数検出した。特に平安時代後期の土壇墓から出土した蔵骨器は、梵字を線彫りした金銅製蓋付きの褐釉四耳壺で、輸入陶器を転用した例として注目される資料であった。

2 調査の方法

昭和 51 年（1976）度に当研究所が発足して以来、平成 7 年（1995）度までの京都市内での遺跡の調査件数は約 13,100 件を越える。これは、遺跡に該当するすべての建設工事に際して発掘調査だけでなく、試掘調査、立会調査という三つの調査方法で対応してきた結果である。その内訳は発掘調査約 1,200 件に対し試掘調査約 1,900 件、立会調査約 10,000 件で、試掘・立会調査の件数が発掘調査を上回っている。この状況は京都市の埋蔵文化財調査の特質である。研究所では昭和 55 年（1980）より、試掘、立会調査専従の係を設け、調査を実施している。調査は建築物の基礎工事や上・下水道、ガス、電気、電話などの埋設工事に伴うものである。また、昭和 52 年（1977）度から長期間にわたる広域下水道工事の立会調査^{註1}を継続して実施してきた。この調査は平安京右京の南西域から北進し、昭和 58 年（1983）度には双ヶ岡地域、昭和 60 年（1985）度には太秦地域、平成元年（1989）度には嵯峨・嵐山地域が対象となり、平成 7 年（1995）度までに大半の調査を終了した。本報告はこの広域立会調査を主体としている。ここでは、研究所が行ってきた各調査方法を概述し、広域立会調査の方法について述べる。

調査方法

調査の方法には発掘調査、試掘調査、立会調査、分布調査がある。

市街地での発掘調査は、狭小な面積の調査が多いため、周辺環境の整備、調整を不可欠とし、作業面では効率化をはかるため、近現代層の除去には動力機械の使用、発掘道具類の工夫、改良を行うなど、現状に適応した対応がなされている。調査の記録においては、基準点測量による記録の統一をはかっている^{註2}。

試掘調査は、遺構の遺存状況、遺跡の範囲を確認することを主要な目的とする。調査では土層堆積状況の観察、遺物採取、写真撮影を行う。1 件ずつの調査資料を作成し、コンピュータによる資料の集積・活用をはかっている。

立会調査は従来の分布調査にかわるものとして位置付けることができる。分布調査は耕作地、山地などで表面地形の観察や遺物の採取を行い、遺跡の有無や範囲を確認する調査といえる。分布調査と異なる点は地下の土層観察が可能なことである。特に、広域にわたる調査では、遺構・遺物の分布、遺物包含層の広がりから遺跡範囲を推定することができる。また旧地形の復原も可能である。

広域立会調査の方法

土層断面図台帳・記録カードの作成 まず調査対象地と周辺の調査事例や文献などの諸資料を収集、検討することから始まる。遺跡の種類、遺構・遺物の遺存状況を把握した後、調査目標を設定し計画を立てる。次に土層断面図台帳を作成する。台帳は調査対象地の工事施工図（1/500）を方眼紙に貼り付け、土層記録のための測点を国土座標に基づき 10m 間隔で設定し、番号を付し、

調査で得た各測点の土層断面、遺構を柱状に図化していく（写真8）。

現場で土層、遺構を記録するためのカードも、台帳に基づき作成しておく。記録カードに必要な項目は、年月日、曜日、天候、担当者名、調査区（工事区）、測点番号、備考で、裏面は土層を図化するため方眼を切っている。測点ごとにカード1枚を基本とする（写真7）。

測点の水準測量 工事掘削前に対象地の道路上で各測点間の距離を測り、台帳に付した測点を明示し、標高を求める。標高値は台帳に記入しておく。測点は検出した遺構・遺物の記録のための基点にもなるため、道路上では確実に明示する。

土層・遺構の検出 工事掘削の進行に合わせ、掘り下げられた壁面で遺物の有無や地山の確認などに留意しながら、測点ごとに堆積土の分層を行う（写真4）。なお識別困難な土層については、土層サンプルを持ち帰り土質、色調などを検討する。次に壁面で検出した遺構の形状と埋土の状況などから柱穴、溝、井戸、墓、流路、池などの遺構の種類を判別する。溝、流路の場合は、両壁面に残存することにより他の遺構と判別でき、流れの方向も得られる。しかし、限定された調査であるため性格が不明な遺構も多い。

検出作業は、工事掘削中の場合が多く、壁面崩落などの危険が伴うこともあり、安全に留意した作業が要求される。

土層・遺構の記録 土層、遺構の検出作業の後、記録カードに記入して行く（写真5）。カードには堆積土層の他に、遺物の出土状況についても注記しておく。遺構についても規模などを図化し、測点からの距離を明記しておけば同1のカードで対応できる。土層、遺構の記録前の写真撮影では、土層断面の他に周辺の状況も撮影しておく。なお、他の撮影断面と区別するため、撮影直前には地点、日付、撮影方向などを明示したボードを写しておく。

遺物の採取 記録を終了した後、遺物を各測点単位で土層、遺構ごとに採り上げる（写真6）。採取した遺物を持ち帰り、堆積土層、遺構の時期を検討する。遺物が微細なとき、土と共に採り上げる場合もある。

室内作業 現場における作業の後、記録カードに記入した土層断面、遺構を台帳に図化する。



写真4 遺構の検出



写真5 土層・遺構の記録



写真6 遺物の採取

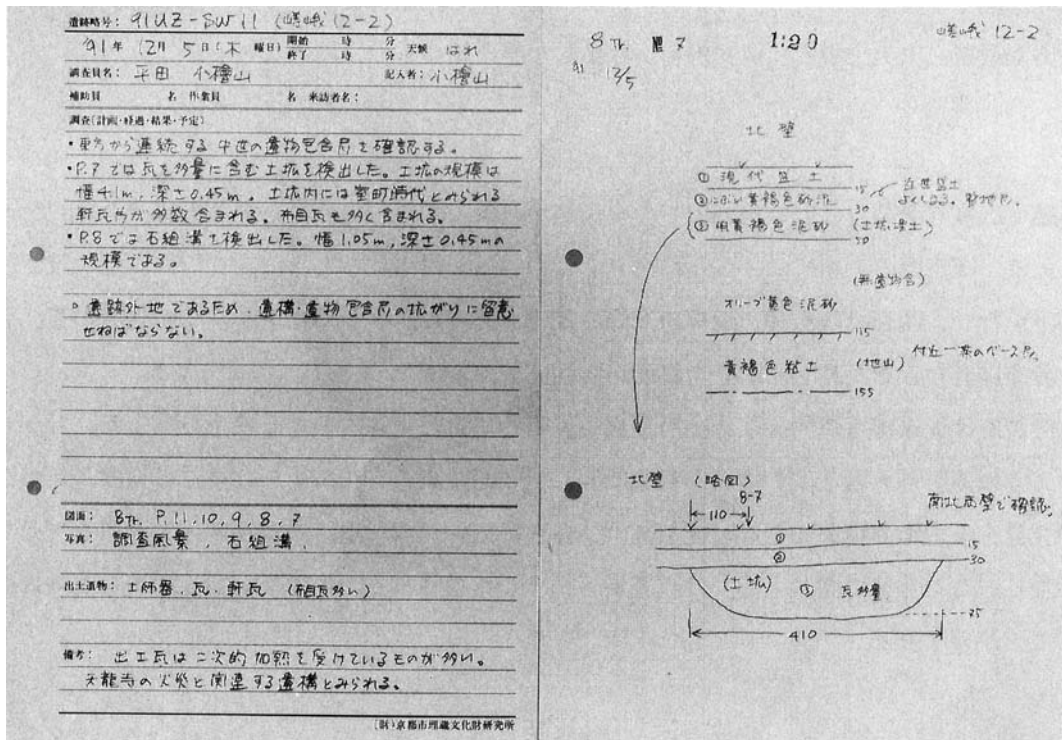


写真7 記録カード

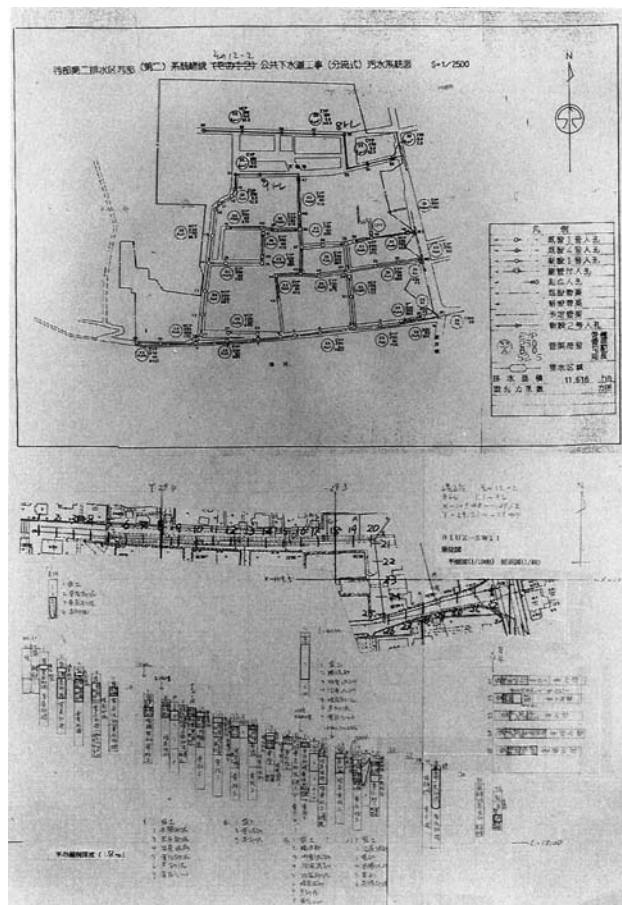


写真8 土層断面図台帳

採取した遺物は洗浄後、その内容を遺物台帳に記入する。遺物台帳に必要な項目は日付、出土地点、出土遺構、出土土層名、遺物内容、収納した整理箱の番号、備考などである。

小結 広域立会調査は広い地域内での全街路が対象であり、そのことから網目状の線的な調査といえる。嵯峨野の調査では、さらに面としての成果が得られるよう、調査前に測点の設定、水準測量を行い、調査では土層、遺構の記録の統一を測った。また周知遺跡外での立会調査、周辺での分布調査などを実施し、調査を側面から補完した。

従来の立会調査は、遺物採取、土層観察を主目的に行われ、対象地も狭小であった。しかし今回のように遺跡外も含む広い地域を対象にし、上述した調査方法によれば、遺跡の範囲、新たな遺跡の発見、旧地形の復原などが可能であり、さらに広い範囲で遺跡の遺存度も知り得る有効な手段となる。ただ今後の課題としては、調査資料が多く蓄積されるため、コンピュータを有効に活用することが望まれる。

註

- 1 加納敬二 他『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 2 田中 琢 田辺昭三「平安京を中心とした埋蔵文化財発掘調査の記録方法の改善について」（『京都市文化観光局資源調査会報告書』京都市文化観光局 1977年）によって昭和52年（1977）に調査位置の表記における標準化が提唱された。

それを受け、昭和53年（1978）、54年に京都市は遺跡調査における公共測量基準点の設置を行った。以後、調査に国土座標を導入し、点としての各調査を有機的に結合させ面的に展開できるようになった。

第Ⅱ章 立地と遺跡

1 嵯峨野の位置と地形

位置 嵯峨野といわれる範囲は一般的に、西は小倉山、北を朝原山で限り、東は御室川、南方を梅津で限るとされている。本報告では、西は小倉山から松尾山、北は梅ヶ畑の平岡八幡宮、東は馬代通、南は三条通から嵐山と範囲をやや広げた地域を調査対象とした。この範囲は、およそ東西 6km、南北 5km で、現在の行政区分では京都市北西域の右京区を主範囲とし、北区、中京区、西京区の一部を含む地域である。京都市都市計画基本図の北嵯峨、宇多野、衣笠山、小倉山、大覚寺、鳴滝、花園、嵐山、太秦、山ノ内、松尾、上桂に該当する。なお、この範囲は古代の行政

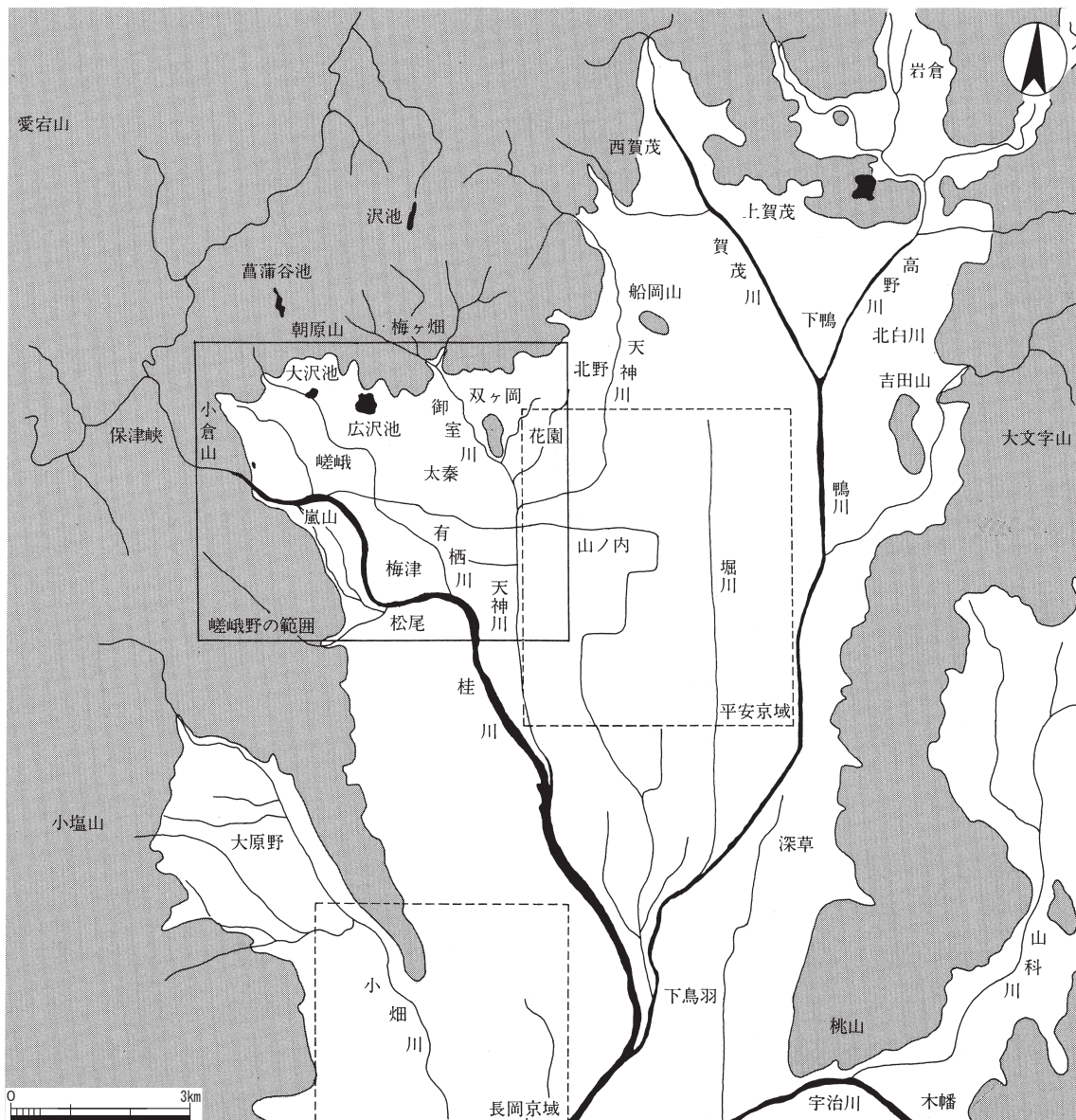


図2 嵯峨野の位置と範囲 (1:120,000)



図3 嵯峨野の地形分類図(1:40,000) 土地分類基本調査図・京都西北部(京都府)改編(1:40,000)

区分ではほぼ山城国葛野郡に含まれる。

地形 嵯峨野の北方を限る朝原山などの山地は、中生代、古生代に堆積した泥岩・砂岩・チャートからなる丹波山地の末端部である。この山地は、清滝川の谷を越えて南東に続き、およそ100mの等高線を境にして、以南では洪積層と沖積層により平坦に覆われ、双ヶ岡のみが独立丘陵として島状に残っている。

この地域の山裾から標高100～25mの範囲に低地が広がっている。全体的には北から南に向かって傾斜する地形であるが、有栖川・瀬戸川付近では北西から南東に向かって傾斜する。大きくは、北寄りの段丘面や御室川、有栖川が形成した扇状地と、南西部の桂川による氾濫平野の二つに分けられる。地形を細分すると中位段丘、下位段丘、低位・沖積段丘、扇状地、緩扇状地、自然堤防、谷底平野・氾濫平野、旧河道の八つに分けられる。^{註1}

後期洪積世に形成された段丘と扇状地は、標高35m以上に位置して傾斜も大きく、花園から鳥居本に至る範囲で、宇多野、常盤野、嵯峨野などの高燥地がこれに該当する。常盤馬塚古墳・仲野親王墓古墳・蛇塚古墳などの前方後円墳や、龍安寺・仁和寺・妙心寺・法金剛院・木島神社(蚕ノ社)・広隆寺・大覚寺・清涼寺・天龍寺などの寺社はこの地域の北半に立地している。これに対し、沖積世に形成された桂川沿いの氾濫平野は、土地も低く傾斜も緩やかで、ここでは、旧河道が左右両岸に多く確認されており、古くから氾濫が頻発したことが判る。特に桂川左岸への氾濫は激しく、嵯峨野・梅津などでは自然堤防を形成し、右岸の嵐山でも同様の状況がみられる。

水系 嵯峨野を下刻する瀬戸川・有栖川・御室川(西ノ川・宇多川)・天神川などの河川はい

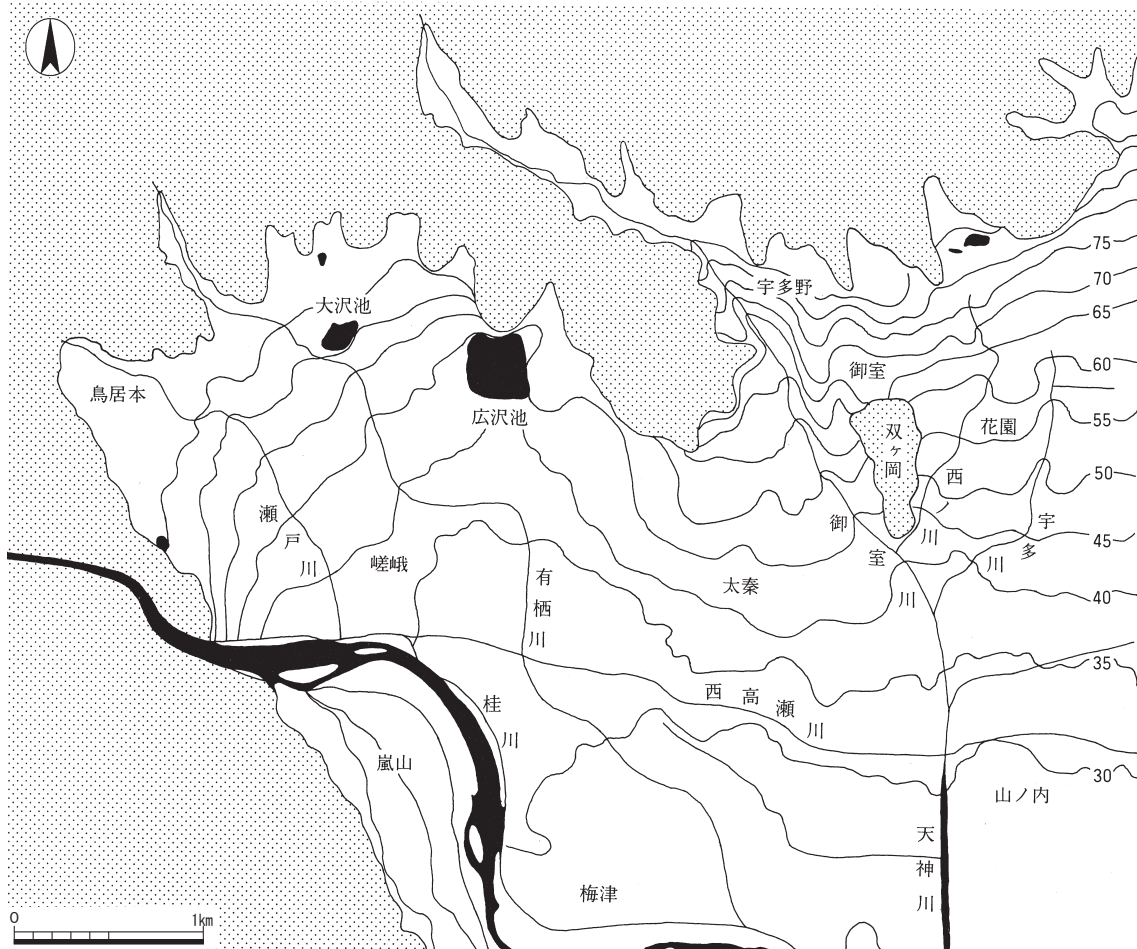


図4 嵯峨野の等高線 (1:40,000)

ずれも桂川に流入している。西方では、古名を芹川と呼ばれる瀬戸川が、鳥居本から清涼寺を経て天龍寺の東に流れる。また、斎川と称される有栖川は、観空寺谷から大沢池を経て、さらに広沢池からの細流と合して、梅津の東で桂川に合流している。

東方の御室川は梅ヶ畑付近から河川沿いに谷底平野を形成し、双ヶ岡の南方で西ノ川と宇多川を合わせたのち、木島神社南東で天神川に合流している。西高瀬川は人工水路として江戸時代に開削されたもので、瀬戸川が桂川に流入するあたりから桂川の水を取り入れ、有栖川と交差し、太秦付近では段丘崖下を通り、さらに天神川と交差し東流している。この川は標高 35m と 30m の等高線の間を、等高線に並行して流れる。桂川は古くから葛野川と称され、大井川・大堰川・葛川などとも呼ばれた。現在でも、嵐山とそれより上流では大堰川・保津川、嵐山より下流では桂川と流域によって呼び方が異なる。また、渡月橋南で水を取り入れた東一ノ井・西一ノ井用水路は南東方向に流れ、松室付近で再び桂川に合流する。これらのことから、嵯峨野はすべて桂川とその支流を含めた流域ということになる。

註

- 1 京都府編『地形分類図』京都西北部 昭和 56 年 (1981)

2 嗟峨野の遺跡と歴史的概観

旧石器時代から古墳時代前期の遺跡（図5）

旧石器時代の遺跡は、菖蒲谷遺跡、広沢池遺跡、沢ノ池遺跡がある。これらの遺跡からは、ナイフ形石器・尖頭器・搔器・彫器などが採取されている。嗟峨野の山麓や池畔は、3万年以上の歴史が刻みこまれている。

縄文時代の遺跡は、早期・前期の土器が上ノ段町遺跡、中期の土器が嗟峨院跡下層、史跡天龍寺下層、広沢池遺跡、菖蒲谷遺跡などで採取されている。時代が下るにつれて遺跡が増加し、山麓から段丘縁辺へ広がったことが判る。

弥生時代に入ると、水稻耕作に生活基盤が置かれるため、河川や湿地に近い段丘上に集落が営まれる。嗟峨野での集落の形成は、中期に始まる。村ノ内町遺跡^{註1}、和泉式部町遺跡、西野町遺跡、松室遺跡などで竪穴住居、弥生土器（畿内第IV様式期）が検出されている。しかし、後期の土器



図5 旧石器時代から古墳時代前期の遺跡 (1:50,000)

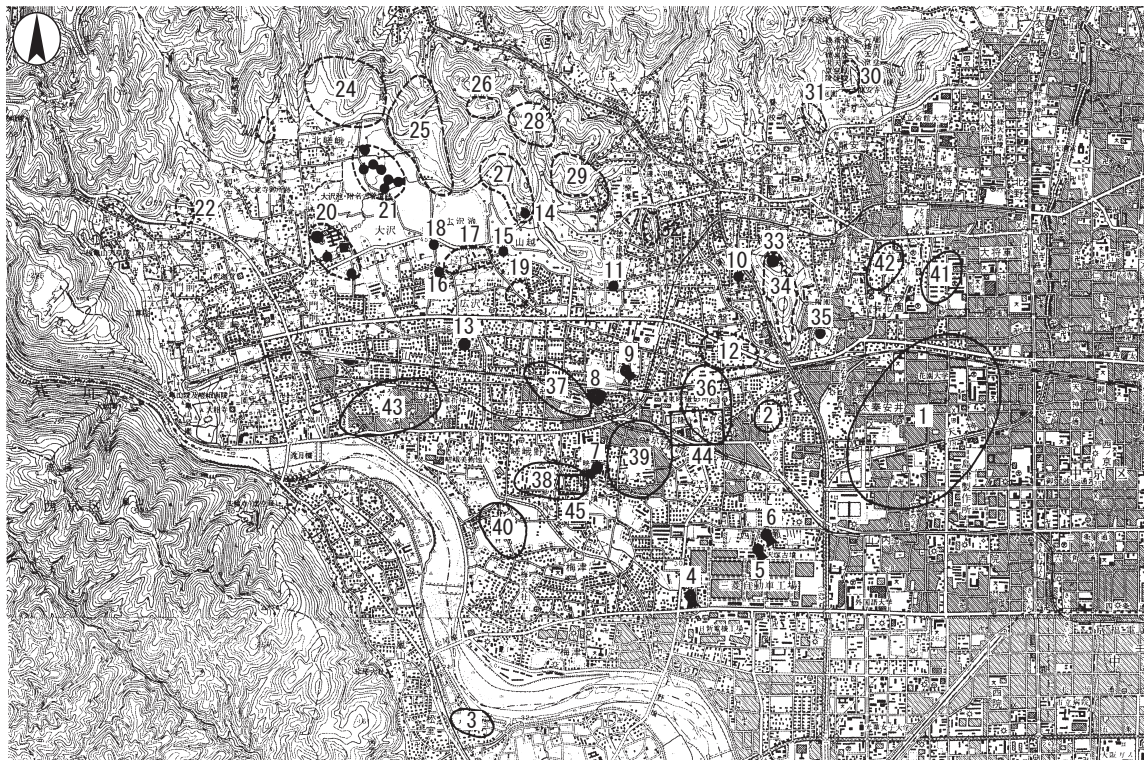
が出土しないことから、中期を限り集落が廃絶したと考えられる。また、梅ヶ畑遺跡では銅鐸4個の出土が知られている。

古墳時代前期に至ると、和泉式部町遺跡、村ノ内町遺跡、西野町遺跡、松室遺跡などから竪穴住居、土師器（庄内・布留式併行期）などが検出された。これらの多くは弥生時代の遺跡と重複している。

古墳時代中期から奈良時代の遺跡（図6）

古墳時代中期には、天神川流域の太秦安井周辺に成立した西ノ京遺跡と、御室川を西にわたった和泉式部町遺跡、桂川西岸の松室遺跡など、嵯峨野の縁辺や周辺地域に竪穴住居や土器類が確認される。しかし、嵯峨野の中心地域では、いまだに竪穴住居や土器は確認されていない。

かわりに、太秦蜂ヶ岡（現広隆寺）を中心とした地区の周囲では、中期以降に属する前方後円墳が築造されて行く。段ノ山古墳、清水山古墳、天塚古墳、仲野親王陵古墳^{註2}、太秦馬塚古墳、蛇塚古墳などが確認できる。6世紀後半以降には、常盤御池古墳を始めとする円墳が嵯峨野の丘陵に築造される。この時期の古墳には、巽古墳、甲塚古墳、印空寺古墳、遍照寺古墳、稻荷古墳、広沢古墳群、一本木古墳、南野古墳群、大覚寺古墳群、嵯峨七ツ塚、常盤東ノ町古墳群などがある。



- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|-------------|--------------|
| 1 西ノ京遺跡 | 10 常盤御池古墳 | 19 南野古墳群 | 28 御堂ヶ池古墳群 | 37 上ノ段町遺跡 |
| 2 和泉式部町遺跡 | 11 巽古墳 | 20 大覚寺古墳群 | 29 音戸山古墳群 | 38 西野町遺跡 |
| 3 松室遺跡 | 12 常盤東ノ町古墳群 | 21 嵯峨七ツ塚 | 30 朱山古墳群 | 39 多敷町遺跡 |
| 4 段ノ山古墳 | 13 甲塚古墳 | 22 鳥居本古墳群 | 31 住吉山古墳群 | 40 嵯峨野高田町遺跡 |
| 5 史跡天塚古墳 | 14 印空寺古墳 | 23 観空寺谷古墳群 | 32 三瓦山古墳群 | 41 花園遺跡 |
| 6 清水山古墳 | 15 遍照寺古墳 | 24 朝原山古墳群 | 33 双ヶ岡一ノ丘古墳 | 42 史跡妙心寺境内下層 |
| 7 史跡蛇塚古墳 | 16 稻荷古墳 | 25 長刀坂古墳群 | 34 双ヶ岡古墳群 | 43 嵯峨遺跡 |
| 8 仲野親王墓古墳 | 17 広沢古墳 | 26 遍照寺山古墳群 | 35 五位山古墳 | 44 広隆寺旧境内下層 |
| 9 太秦馬塚古墳 | 18 一本木古墳 | 27 山越古墳群 | 36 常盤仲之町遺跡 | 45 徳願寺跡 |

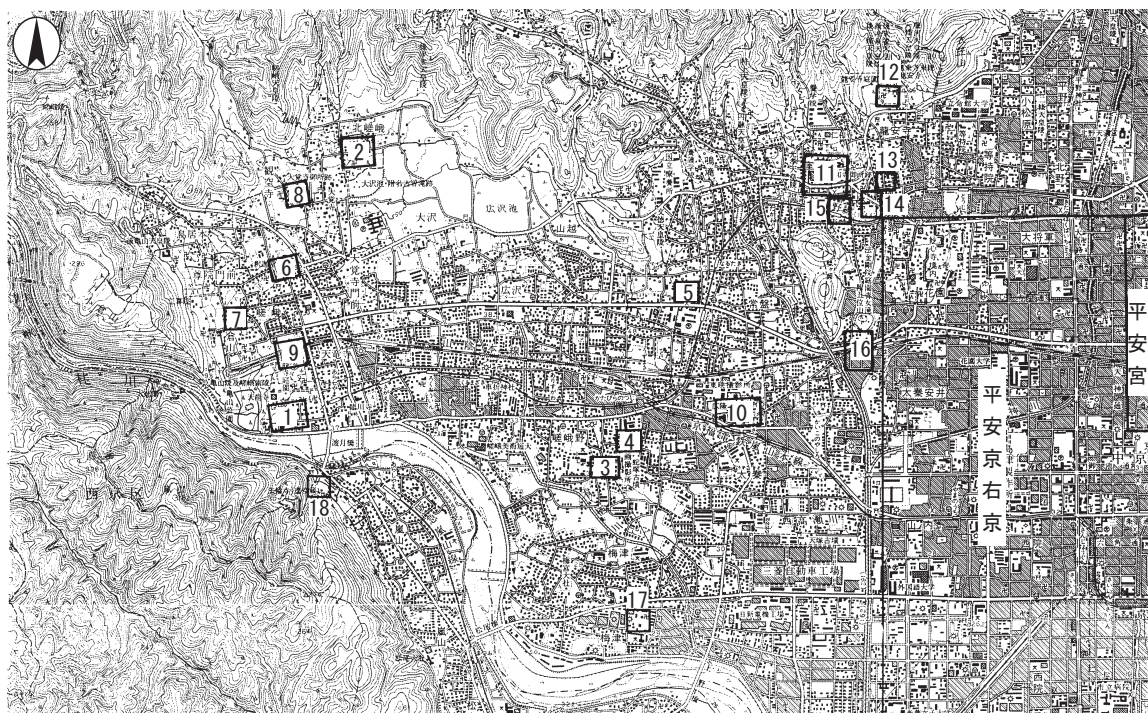
図6 古墳時代中期から奈良時代の遺跡（1:50,000）

る。後期には、広沢池、朝原山、音戸山、御堂ヶ池、双ヶ岡などを中心にした山麓・池畔・山腹に密集して築造される群集墳が姿を現す。鳥居本古墳群、観空寺谷古墳群、朝原山古墳群、長刀坂古墳群、遍照寺山古墳群、山越古墳群、御堂ヶ池古墳群、音戸山古墳群、朱山古墳群、住吉山古墳群、三瓦山古墳群などがある。また、双ヶ岡一ノ丘古墳や双ヶ岡古墳群も後期に属している。これらの古墳と古墳群は、同時期に造られた道路（古道）を媒介にしながら築造されて行ったとみられる。

後期の古墳群と時期を同じくする集落は、^{註4} 広隆寺旧境内とその周辺に見いだせる。^{註5} 常盤仲之町遺跡、^{註6} 上ノ段町遺跡、^{註7} 西野町遺跡、^{註8} 多藪町遺跡、^{註9} 嵯峨野高田町遺跡（仮称）がある。また、平安京右京域では花園遺跡、史跡妙心寺境内下層などが判明している。嵯峨野の西方では、大堰川北岸に近い^{註10} 嵯峨遺跡（仮称）や^{註11} 嵐山東南麓の松室遺跡などがある。これらのほとんどが飛鳥時代から奈良時代にかけて存続する遺跡である。またこの時期に、広隆寺旧境内と西野町遺跡で、瓦を使用した建物が建立されている。

平安時代の遺跡（図7）

双ヶ岡と御室川の東に平安京が造営されると、太秦安井・花園一帯は右京二条・北辺域に取り込まれる。また二条大路から^{註12} 広隆寺南門前に通じる二条大路末道は、平安時代初期には、嵯峨・大堰河畔に通じたといえる。桓武天皇の頻繁な大堰行幸がこのことを示唆する。嵯峨野・大堰河畔が、天皇や親王家の離宮・別業地として脚光を浴びたのも、この道路（古道）の存在と無縁で



- | | | | |
|-----------|--------|--------|-------------|
| 1 史跡天竜寺下層 | 6 棲霞観 | 11 仁和寺 | 16 双ヶ岡山荘 |
| 2 嵯峨山荘 | 7 嵯峨西荘 | 12 円融寺 | 17 修理職木屋 |
| 3 高田別業 | 8 観空寺 | 13 円教寺 | 18 葛井寺(法輪寺) |
| 4 仲野親王別業 | 9 檀林寺 | 14 円乗寺 | |
| 5 源 常山荘 | 10 広隆寺 | 15 円宗寺 | |

図7 平安時代の遺跡 (1:50,000)

はない。いち早く成立するのは、桓武天皇の行幸の目的地と考えられる「大堰離宮」^{註9}であり、続いて神野親王（嵯峨天皇）の嵯峨山荘、葛原親王の高田別業、仲野親王の別業などがあげられる。

嵯峨院が成立する頃には、平安宮殿富門から双ヶ岡にいたり、近衛大路末から直接嵯峨院に達する道が造られたとみられる。双ヶ岡東麓の清原夏野の山荘、源常の山荘、上嵯峨の源融の棲霞観、有智子内親王の嵯峨西荘なども造られている。また梅津周辺では、橘氏創祀の梅宮大社や修理職の木屋、藤原氏の別業なども造営されている。

これらの別業の多くは、平安時代中期に道場や寺院にかわる。大井寺、大覚寺、観空寺、檀林寺、清涼寺、平等寺、双丘寺（法金剛院）をあげることができる。また、遷都以前からの寺院では、広隆寺、徳願寺（安養寺）^{註12}、葛井寺（法輪寺）^{註13}も続いている。

一方、双ヶ岡の北の大内山南麓には、宇多天皇による仁和寺が創建される。以後、双ヶ岡一帯は代々の天皇の御願寺が集中し、四円寺や院家が相次いで造られる。さらに、広沢池畔では遍照寺が建立される。平安時代後期頃には、70を越える数の子院が成立している^{註14}。しかし院政期に入り、鴨東の岡崎や南郊の鳥羽に寺院や離宮が造られ始めると、双ヶ岡一帯の院家に衰退の兆しが現われる。

鎌倉時代以降の遺跡（図8）

鎌倉時代を通じて嵯峨野では、広隆寺、法輪寺、大覚寺、清涼寺などが法灯を保ち、新たな展開が始まる室町時代前期を待つことになる。この間、末法思想の浸透と愛宕信仰の重なりから浄土宗系の化野念仏寺、清涼寺、二尊院などが人々の信仰を集め、奥嵯峨が墓域として成立する。また、鎌倉から政治の拠点に移した武家政権による禅宗寺院が、嵯峨野に建立され始める。花園御所を引き継いだ妙心寺、梅津の長福寺、後醍醐天皇による臨川寺、足利尊氏による天龍寺の造

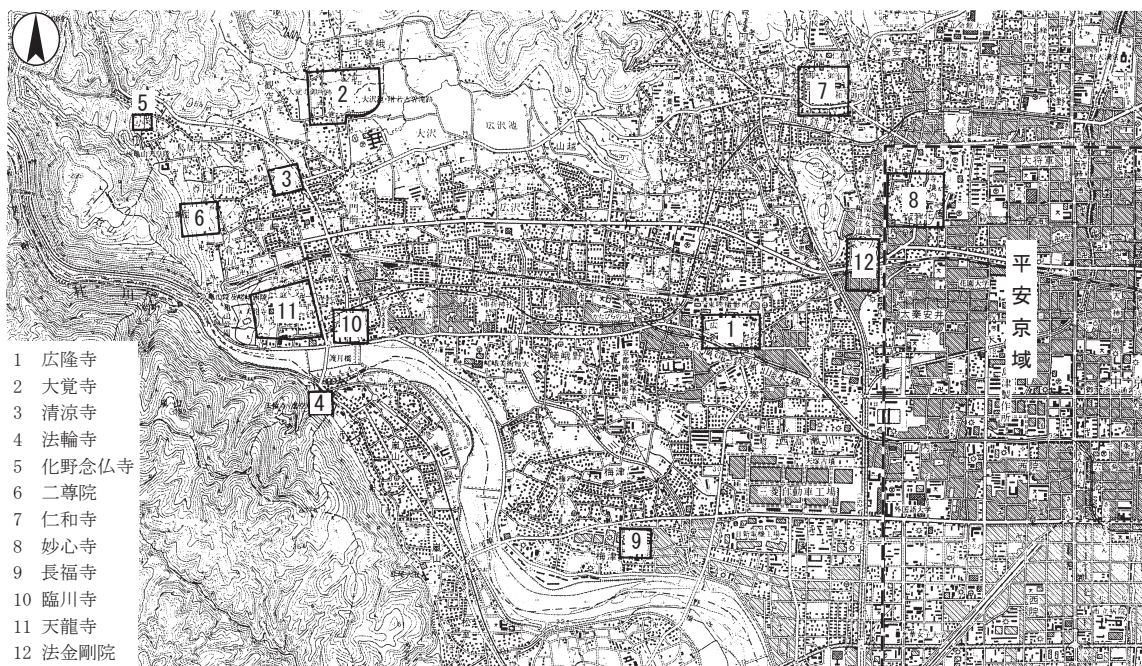


図8 鎌倉時代以降の遺跡 (1:50,000)

宮は、嵯峨野の景観を変えることになった。特に、臨川寺、天龍寺に関わる塔頭は150以上が造られ、周辺には門前町が出現している。^{註15}

室町時代後期には、応仁の乱の兵火にかかり、双ヶ岡地域の仁和寺と院家、法金剛院、妙心寺が灰燼に帰する。また、嵯峨地域の臨川寺、天龍寺、宝幢寺が兵乱の中で全山焼亡の事態を迎える。こののち嵯峨野は、昔日の原野に戻ったほどの寂寞とした風景になる。戦乱の終息した江戸時代に入って、ようやく復興の槌音が響き始めるが、盛時の門前町の回復はなかった。田園や叢林の広がる中を、古道で結ばれた寺院、小庵、古墳、墓地が点在する瀟洒な景観は、寺院の再建が終息し、2世紀半を経過した結果であり、これが近代に引き継がれたものといえる。

註

- 1 調査9-19・10-96で、遺構・遺物を確認している。
- 2 平成8年(1996)度発行の『京都市遺跡地図台帳』では「仲野親王墓古墳」に遺跡名が変更された。
- 3 昭和63年(1988)度の発掘調査10-78で、6世紀半ばの円墳を検出した。これを「常盤御池古墳」と称する。
- 4 広隆寺旧境内の各調査で、古墳時代後期から飛鳥時代の遺構・遺物を検出している。このため、広隆寺建立以前のこの地区で、なんらかの土地利用があったと考えられ、寺院建立以前のこの地区を「広隆寺旧境内下層」と呼称する。
- 5 調査16-70で、古墳時代後期、平安時代から室町時代の遺構・遺物を検出した。
- 6 第Ⅲ章の2で報告。古墳時代後期、平安時代前期の遺構・遺物を検出した。
- 7 第Ⅲ章の3で報告。飛鳥時代、平安時代から室町時代の遺構・遺物を検出した。
- 8 調査11-102・112では、蚕ノ社南側の道路(府道二条停車場嵐山線)で路面遺構を確認している。また文369で杉山信三氏は、平安京の外京、右京二・三条五・六坊の設置企画があったと論考されている。
- 9 発掘調査13-6では、大堰川の北河畔で園池跡を検出し、平安時代前期の遺物が出土した。またその後の調査13-1で、遺構・遺物の分布範囲を確定した。これが桓武天皇の大堰離宮である可能性を指摘している。
- 10 第Ⅲ章の2・3で報告した、連続する路面遺構にあたる。
- 11 調査13-1、調査14-29で、「大井寺」銘軒平瓦が出土した。また『続日本後記』承和9年(842)条に、造大井寺使員を定めた記事がある。この大井寺は大堰離宮の後身か。
- 12 『山城州葛野郡楓野大堰郷広隆寺来由記』(広隆寺来由記)に、推古天皇の時代に秦長倉多牟部が建立したとある。当初は徳願寺と称したが、嵯峨天皇が安養寺に改名したとされる。西野町遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の瓦類が出土する。
- 13 「寺伝」では、和銅6年(713)に元明天皇の勅願により行基が創建したとする。『諸寺略記』には、孝靈天皇の皇女が大井河辺に居住して小社を構え、後に、この地に道昌僧都が寺を開基したとある。『源平盛衰記』の伝承では、天平年中(729～749)に建立され、「葛井寺」と称したが、天長6年(829)に道昌が虚空蔵像を安置し、「法輪寺」の寺名に変更したとある。貞観16年(874)には山腹を開き、堂宇を改修したことも伝える。
- 14 『仁和寺諸院家記』に七十八院の寺名が記される。
- 15 『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』